

---

# 綿の騎士

樹都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

綿の騎士

### 【コード】

N0923BA

### 【作者名】

樹都

### 【あらすじ】

とある「騎士」が邪悪な人形に攫われた女の子を助けに行く話、です。

(ライトノベル作法研究所に投稿したのと同じものです)

1・きしのかくせい

まどろみの中を、光がくぐり抜ける。

ちくり、ちくりと、幾百度も。

長い時間をかけて、おれは目覚めた。

なにものか。

おれは、騎士だ。目覚めたときからおれはそれを知っていた。

騎士。守り手。熱い魂と不屈の意思と鋼の肉体を備える騎士のなかの騎士だ。

おれはまず、おれ自身の魂に注意を向けた。熱く燃えている。おれは自分の名も今いる場所も知らなかったが、そんなことは恐れるに足りぬことだった。

では、肉体は。騎士に相応しい肉体がおれに備わっているかどうか。大地を踏みしめて退かぬ脚は。重厚な鎧を支える肩は。剣を振り上げ盾をささげ持つ両腕は。

確かめるために、おれは体を起こして自分の手足を見ようとした。できなかつた。まるで体中が綿で出来ているように動かない。

体を折り曲げることも、腕を上げること叶わない。

深い傷を負っているのか？

「おほ、ようできた」

焦りはじめたおれを間近に見下ろして、男がそうつぶやいた。相好を崩している。

年寄りだ。白い髪とひげを短く刈っている。身に付けているものは粗末な茶色い服だ。

彼の後ろの、部屋全体も茶色かった。工房、だろうか。壁一面が古い木の棚で埋まっっていて、工具やら、変色した図面の束やらだ。

整理されてはいるのだろうが、全体の印象は雑然としている。老人の顔に刻まれたしわのように。

片隅には、古びた分厚い木箱もあった。何者かを閉じ込めるように、麻ひもでがんじがらめにしてある。紐の交差で作られた文様が怪しい魔術めいていた。

「はじめまして。騎士殿。わしがあんたを目覚めさせた……まあ、作ったとも、言うが」

作った、だと？

ゴレム、という連想が浮かんだ。そんなおとぎ話向けの知識がなぜかおれにはあった。

まさか。おれが、魔術師の土人形だと？

不安と戦うおれに、老人は告げた。

「さて、あんたは騎士だ。勝手に作っておいて頼めた義理でもないんだが……」

おれは一時、疑いを忘れた。老人の声に、真摯なものを感じたからだ。懸命な嘆願をむげにする騎士はいない。

「ルリイを……孫娘を守っておくれ。わしの代わりに、全てかけてわしの」

「おじーたん！」

老人の声に被せて扉が開き、舌足らずな甘い声の主が飛び込んできた。

一目でわかった。彼女こそ、おれが守るべき「姫」だと。

「おじーたん、おじーたん、もうできた？」

幼い。四歳か三歳か。前のめりに部屋に駆け込んだ足取りが危なっかしかった。八チミツ色の髪に濃いブルーのリボン。レース飾りのついた淡い緑のワンピースを着ていた。

老人を見上げる期待に満ちた瞳はとび色。ほおはばら色に染まっている。

十数年すれば、きつとすばらしく美しいレディになるだろう。

老人は娘を、目を細めて見下ろしていた。まなざしには愛情と、それに、老いた者が抱える寂しさが映っていた。おれはそう思った。「あー!」

姫　ルリイがおれに気づいた。もともと丸い目をさらに大きく開き、口元もほころんで、花開いたように喜ぶ。

「わあ！　かあいい！」  
おれに抱きついた。抱き上げた。

……おれはルリイの胸に抱え込まれ、抱き上げられた。いとも簡単に、鼻先を彼女の胸のレース飾りにうずめられる。

幼い子供がおれを抱く。つまりは、おれが、小さい？  
「ぬいぐるみさんだあ……」

ちよつとまで！

騎士は、不測の災難に遭ってこそ鉄の意志を保ち、決して動じてはならない。

とはいえ、ものには限度というものがある。

「そう、わしが作った、この世で一つきりのルリイだけのぬいぐるみじゃよ……」

真っ白いくもり空とレースのカーテンを抜けて、朝の光が柔らかい。

「あさ、です、よお、んしょー!」  
もぞもぞとかけ布団を押しつけて、ルリイが体を半分起こした。声はまだ寝ぼけている。

足を布団に入れたまま、ベッドサイドのたなに腰掛けていた青い

眼の人形を取り上げた。ルリイとおそろいの、薄いピンク色の花模様がついた白いねまきを着ている。

「ロザリーもおはよう。あさ、です、よー」

よー、と言葉を伸ばしたまま、体を前に折って布団につつぶしてしまった。人形　ロザリーを、布団ごと抱く。

「だめですよお、ロザリー。おきないと、あさごはんですよお」

半分転がり落ちるようにして、やっとベッドを出た。裸足でじゅうたんを踏んで、鏡台の前へ。ルリイにはやや背が高すぎる鏡台の上には、ルリイの分とロザリーの分と、これもおそろいの服がたたくんで置いてある。

「みゃああああ」

……ねこ、ではない。服をぬぎながらのびをしている女の子だ。

「はふう……。あ。」

こちらを向いた。

「だめよ、きしたん。あつちむいてなさい」

くるり、と、本棚に腰掛けていたおれは絵本の背表紙と向き合われる。

「ロザリーもお着替えしましょうね……」

いつもの朝だ。

自分が着替えてからロザリーを着替えさせて、自分の髪をとかしてから小さなブラシでロザリーの髪をとかす。

「ルリイ、ごはんよ。おいでなさい」

「はあい！」

母親のノックに応じてから、おれを抱き上げて、枕の上に座らせた。

「ロザリー、いいこにしましょうね。きしたん、ロザリーを守ってね」

おれの隣にロザリーを座らせる。

「ママ、おまたせえ。いまいきまあす」

ロザリーの頭をなでて、おれの額にキスをして、子供部屋を出て行った。

いつもの朝だ……おれも変わらない。

ベッドの向かいには鏡台がある。おれは自分の姿をいやでも目にすることになる。

騎士であるからには甲冑を身にまとっている。灰青色のフェルト地のよろいだ。バイザーもついているが、丈夫にぬい付けてあるので顔に下ろす事はできない。

目は、黒くつぶらだ。丸い目の、熊である。やや青みがかった緑色のくまのぬいぐるみだ。ご丁寧に、かぶとにはこれも丸い耳の形の出っ張りがある。

手も足も、ただ愛嬌を振りまくためにあるかのように短く丸い。

せめて、と思う。せめておれが人形 文字通り人の形をしたものであったら、と。

そう思うと、ロザリーですらうらやましくてならない。

なぜおれは、くまのぬいぐるみとして作られたのだろう。

『そりゃ、人形じゃまずいでしょ』

傍らのロザリーが、面倒くさげに呟いた。……人形であるロザリーの声が、おれには聞き取れるのである。

『あたいもぬいぐるみの声を聞けるけど』

『ええい！ それより、なぜだ、ロザリー』

そしておれの声もロザリーには聞き取れるらしいのだ。

「なぜ、おれが人の形をしていると都合が悪いのだ？ 今の姿よりはおれにふさわしいではないか」

問うと、ロザリーは「はああ」と声に出してため息をついた。肩を落とすかこめかみをもむか、何かしぐさがつきそうなものだが、おれたちは動けない。声を出しても唇すら動かないのだ……おれの顔には口すらない。

『あのね……ここは四才の女の子の部屋なのよ？ 屈強な男のリアルな人形なんかあつたら怖いでしょうが！』

「むう……生意気な町娘ならいいのか」

『世間ではね、あたしみたいなのは「かわいらしいおひめさま」というのよ』

ロザリーは、人形として目覚めてからの年数で言えばおれより年かさである。その分だけ世の中に詳しいことを鼻にかけている。

「中身は下町なまりのとんだお転婆だがな」

『あんたね。騎士サマだつたらレディを大切にしなさいよ？』

「おれの姫以外は女ではない」

ロザリーはしばらく沈黙した。

『……まあ、あんたつて幼女趣味なものね』

ちよつと待て。

「ひ、人聞きの悪いことを言うな！」

『人には聞こえないわよ』

そつという問題ではない。

『だってあんた、毎朝あの子の着替えを眺めているじゃない』

「いや待て。それはルリイが……」

毎朝、着替え始めてからやつとおれの存在を思い出すのだ。あるいは、ごっこ遊びのようなものなのかもしれない。

『でもあんたもまんざらじゃないんでしょ？ じーっとルリイを見つめちゃってさ』

おれは咳払いをした。

「それは、違うぞ。いいか、ロザリー、おれがルリイを見つめて思うところはだな……」

「ただいま！」

ルリイが戻ってきた。同時におれたちの会話はやむ。どういふわけか、人がいるところでは話ができないのだ。

「ふたりともいいこにしてみましたか？」

小首をかしげてそういつてから、ベッドに転がる。おれとロザリーは跳ね上がった。

「あのね、きょうもわたしたちおるすばんなの。いいこでなかよくしましようね」

転がって、おれたちを向いた。とび色の瞳におれが映りこんでいる。

おれを抱き上げた。抱き上げられたおれは、ぎゅう、とルリーの胸に抱え込まれた。

「きょうもいいこにしましようね……」

昨日も、その前も同じだった。サンギョウという地方に革命が起きて以来、このあたりでも日増しに空が曇りがちになり、ルリーの両親は毎日のように外に働きに出ているのだ。それがかわいい娘のためだということも、ルリーは理解している。

ぎゅう、と、ルリーは体全部でおれを抱きしめて丸くなった。

火照ったほおが押し付けられる。

「ちゃんとおるすばんできるもんね……」

ぎゅう、と、こついうときに抱きしめられるのは、体に綿が詰まっているおれの役目だ。

手足が硬く細工が細かいロザリーではこつはいかない。

丈夫にぬい合わせられた単純な形のおれだから、小さなルリーのめいっばいの「ぎゅう」を受け止められる。今のところこれだけがおれにできる唯一の役目である

ちらと眼の端にロザリーが映った。おれをからかって笑っているような気がした。

おれは慥然としていたことにした。  
ルリーがはなをすすった。

## 2・きしのほんりょう

おれが目覚めたあの日から一日もたたためうちに、ルリイの祖父であつた老人が死んだ。

おれがあつた男について知っているのは『ルリイの祖父で、優れた人形職人であり、老いてからも近所の工房で寝起きしていた』ということだけだ。

おれは『人形職人』であつた彼が残した、唯一のぬいぐるみであるらしい。

ルリイの腕に抱かれて、土をかけられる棺を眺めながら、おれは心に叫んだものだ。

『なぜにおれはぬいぐるみなのだ？』

『おれになにができるというのだ？』と。

問いには今も答えが無い。

おれはただ、ルリイに抱かれている。

昼食は、母親が作り置いたサンドイッチだった。ルリイはバスケットを子供部屋に持ち込んで食べた。形ばかり、俺たちにも一緒に食べるふりをさせた。

長い午後は、転がって、絵本を口ザリに読み聞かせて過ごした。おれは本棚の上に戻って、そうした二人を見守っていた。

「りゅうは、とてもおおきくてよかった。きしのけんよりうるこがかたい……」

ルリイのお気に入りのお話を、おれももう暗記していた。竜はとても強く、人の身である騎士の力は限られている。

しかし騎士には、姫がいる。

「そのとき、りゅうのおおきなせなかのむこうに、おひめさまがみえました。おひめさまのために、きしは……」

ちりりん、りん、と余韻を残して揺れる呼び鈴が、朗読を中断した。

「はい、どなたあ？」

舌足らずなりによそ行きの声を作って　母親のまねだ　ルリイは玄関に出て行った。

残されたおれとロザリーは眼を見交わした。たまたま、目が合う転がり方をしていただけただけだ。

『誰が来たのかしら。切り裂き魔だったらどうする？』

「馬鹿をいうな」

おれは眉をひそめたつもりだが眉は無い。

「しつかりした子だ。知らない相手にドアを開けるものか」

『もし押し入ってきたら？』

だれですかあ、と繰り返すルリイの聲がかすかに聞こえてくる。

ドアの向こうの相手は沈黙しているようだ。

「……そのときは、おれが守る」

できるの？　とは問われなかった。

ルリイはしばらく戻ってこなかった。

おれとロザリーがただただ待っている中、ややあつてドアが開く音がし。ルリイがなにやら驚きの声を上げ。走り出さんばかりに、いや、走り出せぬこの身におれが狂おしさを覚えていると。

「ねえねえねえ、この子どもこの子かなあ？」

ルリイは腕に拾い物を抱えて戻ってきた。

拾い物　胴体を抱えられて手足をぶらぶらとさせているそれは、ルリイの半分ほどの背丈の人形であった。

人形は、男だ。ルリイは人形をひとまず床に座らせる。フリルタイ付きの白いシャツを着て、棒のように細い足に気取ったタイツをはいている。ぎよる眼と四角い口、ぴんと尖った口ひげまでが動かせるつくりのようだ。

『かなり、キモいわね。ポイしなさいポイ！　って感じ』

ロザリーがささやいた。

「同感だ、しかしロザリー……」

おれは全身のパンヤが膨れ上がるような戦慄を覚えながら、問うた。

「お前、なぜ今しゃべれるんだ？」

「……あんだだつてしゃべってる。……こいつ、ナニモノなの？」  
「……今までにないことがおきている。となれば、理由は外から持ち込まれたこの人形なのではないか？」

おれたちの声はルリイには聞こえないようだ。謎の人形をためつすがめつ眺めている。

「あら？ これ、なあに？」

人形はベルトの後ろに、革製のケースをつけていた。中に納まっている折りたたまれた紙片をルリイが見つけて、広げた。

字が書いてある。

「えと……『わたくしは、したてや、です。わたくしをつくったマスターは、コンラード・オンウエルといます』……おじーたんのなまえだあ。じゃああなた、おじーたんがつくったのね？」

仕立て屋。なるほど、彼の腰のケースには、身の丈にあった小さなハサミも収められているようだ。服の袖にはまち針がついている。彼は仕立て屋の人形らしい。

しかし……手紙を書いたのは一体誰だ？

『じいさんの昔話を思い出したわ』

かたい声で、ロザリーがささやいた。

「おれもだ」

姫に出会う前に、老人の頼みを聞いた。老人は、おれに言ったのだ。

わしの代わりに、全てかけて

ルリイはなおも手紙を読んでいる。

「『マスターがいなくなつてから、ずっとつごけないでいました。がんばつて、ここまでできました。どうかゼンマイを巻いてください』……ほんとだ、ネジまきついてるね」

仕立て屋の背中には、ブリキ製の『8』の字のつまみがついてい



『うるさい！ ポンコツ！』

ロザリーが反応良くつつこんだ。

『あんたも人形でしょうがっ！ 子供おびえさせてどうするのよっ！』

『カカカカ！ ちっがっうのです。人形は子供のおもちゃではないのですっ！ 真の、人形はっ！ 人間よりも優れているうっ！』

『なるほど……救いようのない失敗作ね』  
同感だ。

「おい、お前も黙れ。本当に」

おれは棚の上から言っつてやった。

「これ以上ルリイを泣かせるとただではおかないぞ」

『ほっほお〜』

ぎよろぎよろと二回転も余分に目玉を回してから、仕立て屋がおれをねめあげた。

『これはこれは、騎士殿であらせられる？ それで？ 一体なにができますので？』

「ぐ……」

もしおれに筋肉があり骨があり歯があつたなら、屈辱に全てがきしんだらう。

『黙ってそこで見ていなさい！ このワタクシ、最高のヒトカタが』

仕立て屋は、いつしかハサミを手にしていた。大仰に構える。

『人間を越える瞬間を〜っ！』

ハサミを振り上げて、跳び上がった。

きよんとしているルリイに向かつて。

その瞬間。

『やめろ、ばかあああああ！』

ロザリーは魂消るような叫びを上げていた。

おれは、ただ一つのことを祈っていた。

真に、おれが騎士であるなら。  
ぬいぐるみで終わらないのなら。  
今この瞬間に、力を。姫を守る力を。おれはそのためこの世に  
いるのではないのか？

ルリイは。

とび色の目でおれを見上げた。

おひめさまのため、きはきはせきをおこす。

おれは、前のめりに柵から落ちた。

「姫！」

せつなに俺が叫べたのはそれだけだ。

仕立て屋の突き出された腕を踏みつけ、再び空中に跳ねてルリイ  
の元へ。

「カカツ！」

空中でバランスを崩した仕立て屋が歯噛みした。

「いまだ！ ルリイ姫、下がって！」

おれは、まだ動けないでいるルリイをひとまず突き飛ばす。

突き飛ばそうと、した。

ぼふ。

絶望的にやわらかい感触がした。俺自身から。

目の前が薄い白い幕の重なりに包まれている。ルリイの胸元のレ  
ースだ。おれの体はそこで止まった。

「きしたん？」とルリイがおれを呼んだ。「カツ」と仕立て屋は笑  
い飛ばした。

背中ではよきりと沈み込む音がして、冷たい切断面がおれの中を  
通った。

ハサミだ。人形サイズといっても、おれの抜けない剣に匹敵する刃渡りはある。

背からパンヤをはみ出させながら、おれは床に落ちていった。

刃は胸には抜けていなかった。厚手のフェルトのよろいのおかげだ。

ルリイは傷つかなかった。おれが誇りうることがあるとすれば、それだけであった。

### 3・きしのたびだち

時が過ぎる。傷口から時が零れ落ちていく。

切り裂かれた背中を下に、おれは床に転がっている。

人の身であれば今頃血の海に沈んでいるのだろうが、ぬいぐるみはやぶけたまま転がるだけだ。

しかし確実に、何かが流れ出していた。

鏡に口紅で、乱暴な文字が書き付けられている。ぬい付けられた丸い目玉の視界は広い。

騒ぐとじよきじよき切ります。従いなさい と、書いてある。

口紅は、ルリイが鏡台にちょこんと乗せていた、お気に入りのものだ。つけることはないけれど、お気に入りだった。

今は先がつぶれて半ばから折れかけて、おれの隣に転がっている。仕立て屋はハサミでルリイを脅し、リボンに乱暴に掴まって頭に乗って、指差すままにルリイを外に連れ出していった。

おれはそれをなすすべなく見送ったのだ。背中を深く切り裂かれたところで、ぬいぐるみは意識を失いはしなかった。

無駄に目覚めたまま、転がっている。

『大丈夫。ルリイはまだ生きてる。怪我もしてない』

ロザリーがぼつりと言った。

落ち着いたようだな、とおれはまず思った。おれが倒れてルリイが泣きながら部屋を出て行く間のロザリーのわめきようはそれはひどいものだった。今なら人形の身でも涙をこぼせるのではないかと思えるほどの。

どれくらい時間がたったのだろうか、いつの間にかずいぶん陽射しが動いている。

まだ生きている、か。

「なぜわかる？」

『あなたには、わからないの？』

あきれた、と小声で付け加えた。

『ほんとにあんたって……。あたしたちのルリイが無事かそうでないか。そんなこともわからないの？』

「どうわかるというんだ。ルリイはあの狂ったカラクリに連れ去られたんだぞ？」

『ぼつちりわかるのよ』

きつぱりと言い切った。

『あたしはルリイの人形だもの』

そういうことはあるのかもしれない。が。

「いったいそれが、なんの役に立つ？」

『馬鹿』

ロザリーの声が再び熱を持った。

『あんたってほんとに大馬鹿野郎ね。頭の中にはパンヤだけ？ おまけに勝手にがんじがらめになってんの。よろい脱げ馬鹿！』

「む、無茶を言うな……」

なぜおれはひるむ？

『なんの役に立つ、ですって？ いい？ ルリイがいて、あたしたちがいるのよ？ あんたはルリイのぬいぐるみなのよ？』

「おれは騎士だ。役立たずの」

背中傷からつぶやくような感覚がある。

「いいか、おれとて夢見たことがある。いつの日か、姫のルリイの危機にあつて、おれは、きせきを、起こすのだと。今のこの身は飯の姿で、しかしてその時こそ、真に騎士としての本領を發揮するのだと。おれは、夢見ていた」

ロザリーのため息を感じた。おれは同情されているのか。

「しかし、奇跡はもう終わった」

一度だけ、ルリイに向かうハサミを逸らした。そして終わったのだ。

「おれはその程度の騎士であつたのだ」

『そうね』

この際、励まさないのも思いやりであろう。

『確かにあんたは、ダメ騎士だわ。けどね、ルリイのお気に入りなんだから』

ロザリーはなぜかそこで口ごもり、やっともう一つ呟いた。

『……ぎゅうされてるくせに』

「うらやましかつたのか？」

返事は聞けなかった。ロザリーはもう一度、『今に思い知るんだから』と繰り返した。

おれは、じゅうたんにしみ込む涙の粒を見たような気がした。

時間が過ぎてゆき、影が伸びる。おれは沈黙し、ロザリーもまた黙っていた。

おれはゆっくりりと、温度が変わっていくのを感じていた。

冷えていく、おれの体。もとより血が通っているわけではない。

凍えたところで不都合は何もない。

認めざるをえないだろう。この冷たさは、心が感じているものだと。そばに、ルリイの体温がない。

しかし、だ。代わりに見出しつつあるものがあつた。目を閉じる

と これも心の中での話だ 離れたところにぽつんと浮かんで  
いる輝きがある。

輝きは遠く、しかし、輝きが発している熱をおれは近いものに感  
じている。

これは、夢か？

「ロザリー、一つ聞きたい」

この感覚について尋ねることにした。

「ルリーの無事がなんとなくわかる、とっていたな。それは……  
体温か？」

『そうよ。ああ、やっと気付いたのね』

ロザリーがほっと息をついた。

『あたたかいでしょ。なくして思い知った？』

「いや、違うな」

ぼんやりと遠い感覚に意識を向けていたために、おれは言葉を選  
べなかった。

「おれは、ルリーを『あたたかい』と感じたことはない」

ロザリーは絶句した。

「ルリー？ いるの？」

性急なノックが響き、おれたちは言葉を失った。ルリーの母親が  
帰ってきたのだ。

女性についてあれこれ品評するのは騎士の礼儀に叶わないが  
ルリーの母親を一言で表現するなら、『貴婦人になりそこねた人』  
であろうか。

幼い頃はきつとルリーに似ていたに違いない。しかし髪はぱさつ  
いて赤みを帯び、体つきは指先まで骨ばってきている。『コウバ』  
という仕事から帰った彼女の質素な装いは、煙でいぶしたようだ。

しかしおれはこの女性を尊敬している。

彼女が身をやつすのは、ルリーを淑女に育てるためだからだ。自

分が途中でなくしたものを、この人は、ルリイに最後まで与えようとしている。そういう強さもあると思う。

「ルリイ？　かくれんぼはやめてちょうだいな。ルリイ？」

今、彼女はうるたえている。部屋にルリイがない。おそらく玄関も開け放たれていただろう。鏡には乱暴な文字が塗りとくられ、床には切り裂かれた人形が落ちている。

彼女はおれを手に取り、血の気の失せた唇を震わせた。

「ルリイ、まさか……」

もし言葉が話せるなら、おれは彼女に誓いたかった。おれは必ずルリイの元にたどり着く。そして守る、と。

もう一つ、伝えたい事がある。

（ロザリー、聞こえるか）

伝わらないかもしれないが、強く念じる。

（いいか、大丈夫だ。お前のおかげだ。任せろ）

そうだ、警察、と呟いて母親が部屋を出る。おれを持ったままだ。

（おれには今、ルリイが感じられる。離れているが、確かにルリイの体温がわかる）

部屋から持ち出される直前、おれはロザリーに、自慢した。

（熱いんだ。泣いているときのルリイはな）

「あ……」

不安がめまいにつながったか、玄関先で母親はよろけた。

おれは汚れた石畳の上に落ちた。

転がったおれの鼻先に、居合わせた犬の前足がぶつかった。みすぼらしい犬だ。古すぎるブラシのような汚れた茶色の毛並みが、垂れた耳までを覆っている。

犬は半端なくしゃみをするように息のかたまりを吐くと、おれを鼻先で検分した。

あるいはおれの中で今昂ぶりつつある熱を、この獣は感じ取っているのかもしれない。

(よし、お前だ)

おれは、犬の瞳を見据えて念じた。

(お前は、誇りある騎士の愛馬だ)

おれの信念が通じたに違いない。

犬は、おれをくわえ上げ、走り出した。

#### 4：きしとひめぎみ

夕暮れの通り。石畳の上に積もったさすが夕陽に灼かれている。馬車が通り過ぎ、硬く細い軌道を残す。

ガタン！ と一度はねた。車輪が大粒の石をはじいたのだ。

はじかれた石は、レンガの壁をわずかに削った。

通りに面した一軒のレンガ造りの小屋だ。壁の低い位置に四角い穴が開いている。そこから低くかすかに、少女のすすり泣く声が漏れているが、道行く人々は気付かない。

穴は、明り取りの窓であった。その向こうは半地下の工房である。今は主がいない工房には、二度と使われない道具類が収められ、差し込む西日によって赤と黒のコントラストに切り刻まれている。時折、行き交う足の影が部屋をよぎる。

明り取りから見えるぎりぎりのところに、座り込んだ少女の靴先だけが見える。

『ええい、泣くな！ 働きなっさ〜い』

カカカカカツと木を打ち合わせる音が、泣き声を遮った。仕立て屋のカラクリ人形が、少女の前でわめいている。ハサミを持った腕を苛立たしげにぐりぐりと回転させる。吊り上った口ひげはほとんど真上を指していた。

『お前はワタクシの召使いなのだっ！』

耳障りな音を立てて、はさみの先で床を削った。何度も同じことを繰り返したのか、床には白くカナクギ文字が刻み込まれている。いわく、>ワタクシのネジを巻け！<

「……やだもん……」

かぶりを横に振ったのか、髪の間が見えた。

カカツ！

「巻くのです！」

仕立て屋は腕を人間にはありえない角度で背中に回すと、回れ右をした。ハサミをつきつけつつゼンマイを少女に向けたのだ。

カカカカカカツ！ カカカ……

「早くぜんまいを巻くのです。巻かないとお嬢さんもあのぬいぐるみと同じ目に……」

言いかけた口が、四角く開きっぱなしになった。合わせて目も見開く。

おれは言っちゃった。

「あのぬいぐるみが、どうした？」

夕陽によってくつきりと縁取られた影がエンブレムのごとくに、工房の床に丸いフォルムを描いている。丸に耳がついている。

すなわち。くまたんのきしたんの影。

おれは今、明り取りの縁にいる。

『ばかな！ぬいぐるみがどうやってここまで来たというのだ！』

折りよく風が吹いた。おれはひらりと工房に舞い降りる。三回跳ねてから、絶妙のバランスで仕立て屋の前に仁王立ちとなった。

「……きしたん？」

ルリイが泣き止んだ。おお、ルリイがおれを見た。しゃくりあげ、目元の涙を拭いた。

おれは、深くうなずいた。……ぬい目がほころびて、頭がグラグラしているのである。

「きしたんだあ！」

立ち上がりかける。スカートのすそが、ふわりと広がった。ルリ

イが動き出すとき、おれはいつも花が開くさまを連想する。

カカ!

『シヤラップです!』

仕立て屋がハサミでルリイの動きを制する。明らかに動揺している、が、

カ……カカカカ……と笑い出した。

『確かにすごい。ここまで来たのは驚きました、が、来るのが精一杯だったようですね』

キィ、と目元が細められている。

『見ればスタスタのボロボロではありませんか。きしどころかスタ袋のごとき有様だ』

「そうだろうな」

自分ではどんな姿になっているのか見えないが、ひどいさまだろうと予想はつく。

「犬は、路地裏でゴミを漁りだすと同時におれの存在を忘れた……」  
堂堂とおれは語り出した。

「おれを拾い上げた掃除人は、おれがぬいぐるみなのを確かめると舌打ちして放り捨てた。職務に怠慢な男だ」

彼が勤勉だったら、おれは今頃ゴミ袋の中だろうが。

「しかもつま先で蹴り上げた。おかげで馬に踏まれずにすんだがな。蹄に二回蹴り上げられて、おれは馬車の車軸に巻き込まれた。知っているか? ぬいぐるみは回転しても目を回さないようだぞ」

『か、代わりに片目が取れかけていますな』

おれの威厳に押されて、仕立て屋は笑うのをやめている。

「すぐそこで車輪が跳ねた音はお前も聞いたな? そしておれは、ここに立った」

おれを見るルリイの目からぼろぼろと大粒の涙が落ちはじめた。

「きしたん、がんばったんだね……」

たとえ声は聞こえずとも、おれの姿が雄弁に、辿った道行きを物語っているであろう。

『それは……すごいというか運のいい方だというか……よくここに  
仕立て屋のヒゲが横一文字まで降りている。』

『偶然ではない』

おれの頭は今度は後ろに倒れ、胸をそらす形になった。

「おれとルリイの絆がおれを導き、友の教えとおれの意思が、ここ  
までの道のりを手繰り寄せたのだ。すなわち……」

ふ、とおれは笑った。ロザリーの言葉を思い出したのだ。

「思い知れ。これが愛されているぬいぐるみの底力だ」

力……力、力……力……。

歯車が引っかかったかのように、カタカタと仕立て屋の顔が動い  
た。

『な、なにが思い知れだ。なにを思い知れというのだ。苦労したか  
らすすごいというのか？ わ、ワタクシだって、ですなあ！』

左手で部屋の片隅を指した。ふたの開いた木箱に切れた麻縄が絡  
んでいる。

『今まで、閉じ込められていたんだぞ？ わずかな動力を守るため  
に自分で自分のネジを巻き続けるみじめさが貴様にわかるか？ ゼ  
ンマイ切れを恐れながら箱をこじ開けたワタクシの焦燥がわかると  
でも言うのか！』

「わからん」

おれは言い切り、仕立て屋はカクンとあごを落とした。

「貴様の物語に聞く価値などない。なぜなら貴様は……」

おれは再び、ルリイに頷きかけた。反動で右腕が跳ね上がりほつ  
れた糸に引っかかって、びしりと仕立て屋を指した。

「貴様はルリイを泣かした！ 子供を泣かす人形はくずだ！」

『ダメレエ！』

限界まで顔のパーツを開いて仕立て屋は叫んだ。

『人間に従属する価値なぞナッシング！ ワタクシが人間を従える  
フューチャア！』

壊れたのではないかと思われるような軋む音が、仕立て屋の胴体から響いた。カラクリも逆上する事があるらしい。

『だからワタクシは動けるのだ！ぬいぐるみはどうだ。子供のおもちゃめ！』

突き出されたハサミが、おれの腕の付け根を挟んだ。おれは振り上げられ、滅茶苦茶に振り回された。

『ははは、どうだどうだ！動けるワタクシがエライのだから。あやまれ！』

なすすべなくおれの体は翻弄される。そうとも、なす術はない。そんなことはわかっている。しかし、しかしだ！

「貴様は……滑稽だ……」

おれは言ってやる。

「おれが貴様に屈することはない！」

『カカカカカカカア！』

カラクリはついに言葉を失った。馬鹿力でハサミが閉じた。腕が切り離され、おれは宙を舞う。

宙を舞いながら、おれはひどくゆっくりとしたときの流れを感じていた。そして、天から降る声を聞いた。

「きしたああああん」

女神のような、ルリイの声だった。

『カカ？』

ぎよつとした仕立て屋が頭上を見上げる。直後

「きしたんをいじめるな~~~~っ！」

ルリイは両腕を振り下ろした。手にしていた分厚い本ごと。

『コカッ』

ニワトリのような悲鳴とともに、あわれ仕立て屋は本の下敷きとなった。

「許さないんだから！」

さらにルリイは両膝で仕立て屋を踏みつけ、ネジ巻きを引っつか

む。

「この！ この！ この！」

力任せにネジを巻く。左巻きに。

『コカコケコカカカクコケコカクツ？』

仕立て屋は首を十数回転させつつヒゲを数十回転させ、ハサミを取り落として動かなくなつた。

結局のところ、おれの使命にとって、動けるかどうかは重要なことではなかつたのだ。

今なら、老人がおれをぬいぐるみにした理由がわかる。思い当たる。

おれは、ぬいぐるみは、ルリイのそばにいるものだ。ルリイのそばにいて、心を支えることに、全ての時間と全存在を賭けることが出来るものだ。

いいとも。おれはルリイのぬいぐるみだ。

「きしたん！ きしたんだいじよぶ？」

ルリイが、おれを抱き上げる。おれの頭がぬれた。ルリイの顔がぐしょぐしょなのだ。

とめどなく流れる涙が、おれをつかむ小さな両手が、くつつけたひたいが、泣きじゃくる合間の息が、熱い。

おれがよく知っている、ルリイの温度。

外れていない片目でルリイを見つめ、おれは眩しさを感じた。

女神だ。おれの、絶対の人。

「あのね、きしたんががんばったから、ルリイもがんばったんだよ。だから……」

必死におれに訴えるルリイ。

ああ、そうか。

おれにとってルリイは女神だが、しかし女神を力づけたのはおれなのだ。

それこそが騎士たるおれの いや、ぬいぐるみたるおれの、本領だったのか。

「だからきしたん、死んじゃダメだよお！」

そして今、おれは女神を泣かせている。

……ロザリーがまたうらやましがるな。

遠のく意識の中で、おれは微笑した。

## 5・きしのやすらぎ

うす闇の中を、ちく、り、ちく、り、とたどたどしい光が通り抜ける。針穴を通して、世界が明るくなる。

どうやらおれは目覚めたらしい。

子供部屋に再び、朝が訪れていた。今日の朝日は雲間に光の筋を広げている。

ルリイがおれを見下ろしている。ベッドに腰掛けておれを膝に置き、一心不乱に作業をしていた。

「んしょ、んしょ、んしょ、んしょ、」

細かい手作業なのだが、一生懸命になるあまり体も動いているのが微笑ましい。

ちく、り、ちく、と右肩を通る感触が、おれを優しくまどろみから引き上げる。

『あれから大変だったんだからね……』

鏡台からロザリーが見物していた。

『ルリイは泣き止まないし、親も心配しまくるし、大人たちはいもしない変質者捜しまくるし……あんた大騒ぎの中で三日も寝てたのよ？ つたく、能天気なんだから』

「ああ……ありがとうな」

おれはロザリーをねぎらった。

「その間、お前が姫についてくれたのだな」

『ふん。独り占めよ。うらやましい?』

つんとした答え。しかし、涙声が混じっていた。

「ありがとう」

おれは繰り返した。

「んしょ、んしょ、んしょ、んしょ、」

ちく、り、ち……ちく、り、ちく。

ゆっくりと一針づつ、ルリイが裁縫を進めている。

じつと真剣なまなざしでおれを見つめ、腕をぬい付けてくれている。

「んしょ、んしょ！　んと、そいで、たまどめ、だよねえ？　できるかなあ」

『カカ。』

ルリイに問われて、仕立て屋が励ますようにうなずいた。ルリイのそばに腰掛け、手元には何の冗談なのか、作りかけのごく小さなくまのぬいぐるみを置いている。器用に玉止めの手本をやって見せた。

「……驚くタイミングがわからん」

『カカ?』

おれににらまれた仕立て屋は、びくりと肩を震わせた。ヒゲは真下を向いている。

「なぜお前がここにいる」

『カカカ……』

仕立て屋は首を回し、助けを求めるようにロザリーを見た。どうという力関係だ?

『あー……よしよし。そうぴりぴりしなくても大丈夫だから』

ロザリーがとりなす。

『そいつね、しゃべれなくなってるんだけど……故障だかショックだかで』

なるほど、たしかにあの体験はショックだろう。

『筆談したけど……なんか、主がいることの喜びに目覚めたらしいよ。ぎりぎりの体験で』

「あれでか？」

おれはまじまじと仕立て屋を見る。仕立て屋は顔を背けて、『力』と呟いた。

『まあ、いいんじゃない？ こいつがいるとあたしたちしゃべれるみたいだし。魔力だかなんだか知らないけど』

そういうものか。……いいのか？ それで。

「できた！」

ルリイが玉止めを成功させた。おれの肩からぴょんと飛び出た糸の先で、大きな玉止めが揺れている。それがおれの視界の端にある。

……まあ、勲章だと思おう。

「おじたんもおつかれさま。おさいほうおしえてくれてありがとう」

ルリイになでられた『おじたん』はうやうやしく胸に手をあてた。

口元が緩んでいる。長方形に。

『つたく。うちの男どもは変態ばかりなんだから……』

聞き捨てならないことを言う娘がいる。

「待て！ こいつはともかくおれは……」

『着替えをのぞいてるし』

「あれはだな！ 前にも言いかけたが……」

ええい！ うろたえるようなやましいことは何もないのだぞ？

「ルリイを見て……その、なんだ、白い、きゃしゃな体を見てだな、

おれが思うところは……」

「きしたんのえっち……」

おれの弁明を最後まで聞かず、ルリイはほおを赤らめて呟いた。

ルリイが。

俺たちの言葉が聞こえていたのか？ ロザリーは息を呑み、仕立て屋もヒゲを逆立てた。

「あら？」

ルリイはくびをかしげ、そつと自分の口元を押さえた。無意識の  
咳きだったのか。

「えつと……」

左右を見て、ついでに仕立て屋に向こうを向かせる。

「おはよ、きしたん」

ルリイがおれに口づけた。はなとはなをぎゅっつくっつけて。

ずっとこの子を見守りたい。

おしまい。

(後書き)

読んでくださってありがとうございます。

お気に召したら一言残していただけるととてもうれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0923ba/>

---

綿の騎士

2012年1月2日01時48分発行